

# 英国貴族ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィルの 社会思想と女子農業・園芸学校の創立

Frances Evelyn Greville, Countess of Warwick (1861-1938): the philosophy and  
practice of women's agricultural and horticultural education

橘 セツ\*  
Setsu TACHIBANA

## Abstract

This paper is concerned with life history/life geography of the Countess of Warwick, Frances Evelyn Greville (1861-1938), also known as 'Daisy'. Lady Warwick's life was a paradox: her luxuriant aristocratic lifestyle was increasingly at odds with her conversion to socialism from around 1905, and the left-wing political activity that she undertook for the rest of her life. This paper looks at three different landscapes with which Lady Warwick was closely associated: Easton Lodge, Warwick Castle and Studley Castle. This paper then focuses on Lady Warwick's philosophy and practice in relation to women's agricultural and horticultural education. She opened the Lady Warwick Hostel in Reading in 1898, before developing Lady Warwick's College at Studley Castle in 1903. The college offered a high standard of horticultural practical training and education for women. Finally, this paper introduces the Japanese student, Taki Handa, who studied at Lady Warwick College from 1906 to 1908. The paper evaluates how Lady Warwick's horticultural school contributed to the establishment of a new female branch of the horticulture profession concerned with 'the lighter branches of agriculture'.

キーワード: ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィル Countess of Warwick, Frances Evelyn Greville (1861-1938), 女子農業・園芸訓練学校 agricultural and horticultural training school for women, ライフヒストリー/ライフジオグラフィー life histories/life geographies, イーストン・ロッジ Easton Lodge, スタッドリーにあるレイディ・ウォリック・カレッジ Lady Warwick College, Studley

## I はじめに

英国貴族ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィル Countess of Warwick, Frances Evelyn Greville (1861-1938)<sup>註1</sup>は、19世紀末の英国で女性のための農業・園芸訓練学校 Lady Warwick Hostel を開学した。本稿では、英国の上流階級に生きた伯爵夫人である彼女が、どのようにして女性のための農業・園芸訓練学校を設立するに至ったのか、その経緯について考察する。ウォリック伯爵夫人は、本稿で紹介するように社交界の華として社会の政治的・文化的キーパーソンと交流しながら、

---

\*関西国際大学現代社会学部観光学科

女子農業・園芸訓練学校を創立する契機となるような社会思想と問題意識をはぐくんだ。

本稿では、そのような彼女のライフヒストリー/ライフジオグラフィーをたどることから、彼女がどのような思想的過程を経て女子農業・園芸訓練学校を創立することになったのかその一端を明らかにする。ライフヒストリー/ライフジオグラフィーの視点は、英国の文化地理学者ダニエルズとナッシュが提唱する方法で、人々が、実際に目にして、その中に生き、語り、創造しようとした場所や風景の側からアプローチしてかれらの人生とかれらが生きた時代と社会、文化を照らし出そうという方法である。その作業によって、かれらの生きた時代と社会、文化の文脈に、彼らの人生を明確に位置づけることができる<sup>注2</sup>。

そこで、本稿では、ウォリック伯爵夫人のライフヒストリーにおいて、彼女と結びつきが深い土地や場所・風景に注目しながら彼女の社会思想と実践について考察する。彼女のライフヒストリーをたどるなかで、立ち現れるライフジオグラフィーの重要な場所として、まず、生家メイナード家の地所イーストン・ロッジ Easton Lodge とその庭園、次に、結婚した相手のブルク卿フランシス・グレヴィルが第 5 代ウォリック伯爵を継承した時に相続した地所ウォリック城 Warwick Castle、そして、最後に本稿のテーマでもある彼女が新しく開学した女子農業・園芸訓練学校の地所である。本稿では、ウォリック伯爵夫人ゆかりのこれら 3 つの地所の風景の改良や管理の方法や過程をたどることで、彼女のライフヒストリー/ライフジオグラフィーを考察する。

さらに、最後に、ウォリック伯爵夫人が開学した女子農業・園芸訓練学校に 1906 年から 1908 年まで留学した日本人学生、半田たき(1871-1956)の視点と、農業・園芸訓練学校を修了した女子は、当時の社会でどのようにみられていたのかを示唆する当時の小説からの事例を紹介して本稿のむすびとする。

## II ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィル (1861-1938) のライフヒストリー/ライフジオグラフィー：社交界の華と社会主義思想実践の二面性

### 1. 回顧録と 4 冊の伝記

本稿でウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィルのライフヒストリー/ライフジオグラフィーをたどるための主な資料として、彼女自身が 68 歳の時に著した回顧録 *Life's Ebb and Flow* (1929) と彼女の十数冊の著作<sup>注3</sup>、さらに二次資料として彼女の死後に作家やジャーナリストによって書かれた 4 冊の伝記がある：

回顧録：

- a) Frances Evelyn Maynard Greville Warwick (Countess of) (1929) *Life's Ebb and Flow*. W. Morrow & Company (全 287 頁)

死後に刊行された 4 冊の伝記：

- b) Theo Lang (1965) *My Darling Daisy*. Michael Joseph (全 196 頁)
- c) Margret Blunden (1976) *The Countess of Warwick*. Cassell & Co. (全 356 頁)
- d) David Buttery (1988) *Portraits of a Lady*. Brewin Books. (全 48 頁)
- e) Sushila Anand (2008) *Daisy: the life and loves of the Countess of Warwick*. Piatkus. (全 310 頁)

これらの 1 冊の回顧録と 4 冊の伝記によると、彼女のライフヒストリー/ライフジオグラフィーは貴族夫人として華やかな社交界を生きた一方で、1890 年代半ば以降、不況のため社会の底辺で困窮する

時代背景の中、社会改革・社会主義思想へ関心を向け、貴族夫人である彼女がパトロンとして支援できることを探り実践したという二面性を持つ。回顧録と伝記には、彼女が内包するこれらの2つのパラドキシカルな側面が両方とも描かれているが、作者の視点や興味関心によってこの両者の記述バランスは多様である。

a)の回顧録のタイトル *Life's Ebb and Flow* は、「人生の潮の満ち引き」という意味で、人生のよい時も苦しい時をも見つけ直して記述した287頁の作品である。この回顧録の記述は、先祖にオリヴァー・クロムウェルがいるという生家メイナード家の系譜と16世紀末エリザベス1世から下賜されて以来所有する土地（地所と館イーストン・ロッジ Easton Lodge）について語るファミリー・ヒストリーから始まり、彼女自身が生まれてから執筆当時の68歳までの人生の出来事と思い出を時系列とテーマに沿って語る。彼女の豊かな人間関係の反映である多くの書簡や記録をエビデンスとして引用して記述され、写真と図版も多く含む。本書は、彼女の視点から彼女の人生を回顧して編まれ、著述のスタイルにおいて感情や感想に走りすぎないようなバランスを保っている記録として読むことができる。

この回顧録の第16章のタイトルは「レディングとスタッドリーにおける先駆 Pioneering at Reading and Studley」とされ、副題として「女性の仕事の新しい進路 women's work on new lines- 女性庭師 the girl gardeners- イーストンにおける救世軍の労働の実験 a salvationist labour experiment at Easton」(242-255頁)と記される。この第16章は、本稿でとりあげる女子のための農業・園芸訓練学校の設立の動機と経緯・運営参画・限界がテーマとなっている。副題にも記されているように、当時、若い女性の自活・自立の新しい手段として、女性庭師 the girl gardeners という進路が提案されている。

b)c)d)e)の4冊の伝記は、第二次世界大戦を挟んで、戦後、彼女の死後27年を経た1965年以降に刊行されているが、これらの伝記は、彼女の関係者の多くが他界した後に、明らかにできるような後日談も含まれていた。これらの伝記には、資料として、彼女がやり取りした数多くの書簡が使用されている。b)の Theo Lang による伝記のタイトル *My Darling Daisy*: (1965)は、皇太子時代のエドワード7世が彼女へ出した手紙の呼びかけの言葉を象徴するものでもあった。c)Margret Blunden は、イーストン・ロッジの地所の近くで生まれ育ち、家族とともに幼少期から地元ゆかりのあるウォリック伯爵夫人への親しみと興味を持ち続け、修士論文として彼女について研究を行い著作として結実させた。d)David Buttery は、ウォリック伯爵夫人の肖像画と写真から彼女の人生をたどれる簡易なパンフレットで、彼女の生家イーストン・ロッジの売店で売られている冊子である。e)Sushila Anand による伝記は、2008年に刊行され、ウォリック伯爵夫人についての最新の知見がまとめられている。

## 2. ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィル (1861-1938) のライフヒストリー/ライフジオグラフィ

本稿の主人公は、1861年12月10日にロンドンのパークレー・スクエア27番地にて生まれた。父親は、メイナード子爵を継ぐ予定の軍人のチャールズ・メイナード Colonel the Hon. Charles Maynard であり、母親はブランシェ Blanche (旧姓フィッツロイ Fitzroy) であった。彼女が生まれた時、父は50代近くなのに対して、母は18歳の若さであった。生まれた子は、フランセーズ・イヴリン Frances Evelyn Maynard と名付けられたが、彼女は幼少時から一貫してみなに愛称のデイジー‘Daisy’と呼ばれた。

生家のメイナード Maynard 家は、イーストン・ロッジ Easton Lodge の地所と館を所有する。イーストン・ロッジの地所は、先祖の Sir Henry Maynard が1590年にエリザベス1世から下賜された10,000エーカーの Manor of Estaines Parva にルーツを持つ。イーストン・ロッジは、ロンドンから約70km北東

に位置し、エッセクス州ダンモウ Dunmow のリトル・イーストン Little Easton 村にある。

1865 年彼女が 3 歳のとき生家メイナード Maynard 家の父チャールズ、1 ヶ月後に祖父が相次いで亡くなり、祖父の遺言で、メイナード家の地所であるイーストン・ロッジは、わずか 3 歳の彼女が相続することになった。以降、フランセーズ・イヴリンは、生涯にわたって生家メイナード家の地所イーストン・ロッジを自身の重要な生活拠点の一つとして所有し、成長してからは、そこで、多くの賓客をもてなし多彩な社交の舞台とした。

美しく成長した彼女は、18 歳で社交界に出ると、ヴィクトリア女王にみそめられ、女王の四男オルバニー公レオポルドの花嫁候補とされ、縁談が途中まで進んだが、実現しなかった。

1881 年 4 月、フランセーズ・イヴリンは、19 歳でブルク卿フランシス・グレヴィル Francis Greville, Lord Brooke (1853-1924) と結婚する。二人の結婚式は、ウェストミンスター・アビーで挙行された。社交界のセレブの結婚式は、豪華な結婚式となりロンドン絵入り新聞 *Illustrated London News* (1881 年 5 月 7 日号) に挿絵付きで大きく報道された。彼女の回顧録にも 66 と 67 頁の間に図版が引用されている。夫のブルク卿は、第 5 代ウォリック伯爵 5th Earl of Warwick を継承し、ウォリック城 Warwick Castle を相続することが約束されていた。

結婚後も、フランセーズ・イヴリンは自身が相続した生家のイーストン・ロッジの邸宅を改装して、管理するとともに、地所のコテージ Stone Hall (現在、非公開) を改築した。地所の庭園についてもヴィクトリア時代の流行である色彩豊かな整形形式花壇からなる庭園に「友情の庭園 ‘The Garden of Friendship’」, 「感傷のボーダー花壇 ‘The Border of Sentiment’」, 「バラ園 ‘Roserie’」, 「シェークスピアのボーダー花壇 ‘Shakespeare’s Border’」などのロマンチックな名前をつけてデザインした<sup>注4</sup>。一方、夫のブルク卿は、狩り、鳥撃ち、魚釣りなどの英国紳士の興じるスポーツと社交に夢中で、自らの地所はもとより国内から世界中をとびまわることでも忙しかった。

1882 年 9 月に、フランセーズ・イヴリンは、嫡男の後継息子を産んだ。男児は、Leopold Guy (Leopold Greville) と名付けられ、第 6 代ウォリック伯爵 6<sup>th</sup> Earl of Warwick (1882-1928) となることが約束されていた。貴族の結婚は、爵位と地所を承継、相続する嫡男を産むことが最大の義務であった。この嫡男出産で、彼女は義務から解放されて義務から自由になった。

1892 年 12 月夫の父の第 4 代ウォリック伯爵が他界して、1893 年に夫ブルク卿 Lord Brooke は第 5 代ウォリック伯爵 5th Earl of Warwick を継承し、夫婦の住まいをウォリック城 Warwick Castle に移した<sup>注5</sup>。夫婦は、そこから 3 年をかけてウォリック城の大改装事業にとりかかった。

フランセーズ・イヴリンは、ブルク卿との結婚後、1880 年代から、皇太子アルバート (後のエドワード 7 世在位 1901-1910) の社交グループ The Marlborough House Set をイーストン・ロッジに招いてもてなした。彼女は、当時の愛人ベリズファド卿との間のトラブルの解決を彼と親しい皇太子アルバートに相談したことから二人は親しくなった。伝記によると、1889 年から 1897 年までの約 8 年間、デージーは皇太子アルバートと妃公認の愛人関係 (ロイヤル・ミストレスまたは、オフィシャル・ミストレス) となった。これは、当時の上流階級の社会規範の中では許容されていた既婚者の恋愛関係のルールに則っていた<sup>注6</sup>。

彼女の愛称は、デージー ‘Daisy’ であったが、音楽家ハリー・ダクレ Harry Dacre が 1892 年に作詞・作曲しロンドンのミュージックホールで大人気となった流行歌「デージー・ベル Daisy Bell (Bicycle built for two)」に歌われるデージーも当時皇太子と愛人関係にあった彼女がモデルだと想起されている。恋多き新しい女性と当時の最新の乗り物であった二人乗りのタンデム式の自転車で、最愛の人とともに

に走ろうと誘うことがテーマとなったユーモアあふれる明るい歌詞である。当時、自転車に乗る女性は、新しい女性像を表象していた。先に紹介した a)の回顧録によると彼女自身も自転車を先駆的に乗りこなす新しい女性であった(71頁)。

彼女は嫡男の Leopold Guy に続いて、4人の子を出産した。しかしながら、伝記によると、他の4人は、夫以外の愛人との子であったことが明らかとなっている。Marjorie Duncombe (1884-1964)と Charles Greville (1885-188)の2子の父親はベリズファド卿 Charles Beresford であった。Maynard Greville (1898-1960)と Mercy Gamble (1904-1968)の2子の父親はジョー・レイコック Joe Laycock であった。彼女は、皇太子との愛人関係が1897年に終わった直後にジョー・レイコック Joe Laycock と交際することになり、2子を出産した。このうちの長子 Maynard Greville は、彼女の生家メイナード家の地所を相続して継承することとなった。

夫のブルク卿が、第5代ウォリック伯爵を継承したことを社交界に広く知らしめて祝賀する大パーティが、3年かけて大改装されたウォリック城 Warwick Castle を舞台に1895年に400人近い客を招いて行われた。パーティでは、彼女はウォリック伯爵夫人(レイディ・ウォリック)として、ウォリック城の女主人としてお披露目された。このパーティでは、仮装舞踏会も行われ、彼女はホステスとしてマリー・アントワネットの派手で豪華な仮装をして来客をもてなした。このパーティの様子が、当時のジャーナリズムで書き立てられたが、特に、左派新聞クラリオン Clarion 誌で、これは貴族の贅沢な無駄遣いの散財パーティだと強く批判され、一方には食べ物にも困る貧しい階層の人々がいることを贅沢三昧の貴族は考えたことがあるのかと主張した。この記事が新聞掲載された翌朝、彼女は、ロンドンのフリート街のクラリオン新聞社を自ら訪ね、編集長のロバート・ブラッチフォード Robert Blatchford 1851-1943 に面会し、記事の取り消しを求めた。レイディ・ウォリックは「貴族が大がかりのパーティや放蕩をすることで、近隣に臨時の雇用を産み出すことに貢献している」と述べた。しかしながら、ブラッチフォード編集長は、彼女に、貴族の気まぐれの貧者への施しでは、社会の貧困などの大問題は解決しないこと、社会の構造を変革することによって社会の救済が必要であることを主張した。この考えに彼女は感銘を受けて、社会改革・社会主義思想に関心を持つ貴族の社会主義者となった。この出来事はレイディ・ウォリックが1日で社会主義者に転向したという伝記が記す伝説の1日である。

ウォリック伯爵夫人は、自身の財力で、社会主義的運動をパトロンとして支援した。彼女は社会主義思想を熱心に学び、イーストン・ロッジを拠点とする交友関係は、社会派作家やフェビアン協会の社会主義者たちに広がった。具体的には、H.G.Wells, George Bernard Shaw, Beatrice and Sidney Webbs, Ramsay McDonald and other Fabians, A.A.Milne, G.S.Elgood, Walter Crane などの名前があげられている。

さらに彼女は、女子教育・女子職業教育に熱心に取り組んだ。本稿のテーマとなる女子農業・園芸訓練学校を、初めは1898年にレディングにて Lady Warwick Hostel として設立し、1903年にウォリック州にあるスタッ Dudley Castle を彼女が買い取って、そのゴシック建築の塔のある城を学校の校舎と寄宿舎とした。詳しくは次章で検討する。

1902年から、ウォリック伯爵夫人は、庭園デザイナーのハロルド・ペト Harold Peto 1854-1933 に依頼して、イーストン・ロッジの庭園改造を行った。ハロルド・ペトは、20世紀初期エドワード7世時代の英国の庭園スタイルを牽引する代表的な庭園デザイナーであった。彼のデザインする庭園は、イタリア風庭園でテラスやパーゴラを特徴とする<sup>註7</sup>。20世紀初めに英国で流行した日本庭園に影響を受けた庭園のコーナーもイーストン・ロッジの池のそばにたたずむ。





図 1 : イーストン・ロッジ地所の教会墓所にあるウォリック伯爵夫人の墓碑銘と胸像 (2018 年筆者撮影)

先に紹介したウォリック伯爵夫人の回顧録の第 16 章の副題の一つ「イーストンにおける救世軍の労働の実験 a salvationist labour experiment at Easton」(242-255 頁)に紹介されているように、ハドリーにある救世軍の飲酒中毒者リハビリ施設であるホステル (the Salvation Army hostel at Hadleigh near Southend) に収容されている 67 名の男子の「酔っ払い inebriates」を社会復帰の訓練も兼ねて造園作業に携わる労働者として雇うという社会実験をデイジーはイーストン・ロッジ地所を舞台に実施した。

このようにウォリック伯爵夫人は、女子のための農業・園芸訓練学校を開設するだけではなく、社会が改善される助けとなるような教育に関わるような事業を次々と支援した。たとえば、裁縫学校 needlework school やビゴット中等学校 Bigods Secondary School などである。

ウォリック伯爵夫人は政治運動にも興味を示し、彼女は、1924 年に労働党から選挙に出馬したが落選した。彼女の財力は無尽蔵ではなく限界があった。ウォリック伯爵夫人の晩年は、財産管理の不備で、借金に苦しむこととなった。そこで、彼女は、借金返済のために、エドワード 7 世の皇太子時代に交わした書簡 (ラブレター) を公にして出版しようと画策するが、阻止され、書簡の買い取りの申し出によってこの問題は解決した。

ウォリック伯爵夫人は、晩年は動物愛護・動物福祉の問題に取り組んだ。彼女は、サーカスで虐待された動物を多く買い取り、イーストン・ロッジの地所で飼育して動物たちの世話を楽しみながら共に暮らした。

### Ⅲ ウォリック伯爵夫人が 1898 年に創立した私立女子農業・園芸訓練学校：発展と限界

ウォリック伯爵夫人は、19 世紀末の英国で女性のための農業・園芸訓練学校の必要性を訴え、設立計画を雑誌 *The Land Magazine* の 1897 年 12 月号に発表した<sup>註 8</sup>。

ウォリック伯爵夫人がこの農業・園芸訓練学校の志願者として想定したのは、「ジェントルウーメン 'gentlewomen'」あるいは「専門職家庭の娘たち」とされる上流・中産階級層の自活・自立が必要な女性たちであった。19 世紀末から 20 世紀初期の英国社会では、それらの女性たちが職業的に活躍する機会は限られていた。そのような女性たちにふさわしい種類の農業関係の仕事について、農業・園芸訓練学校では、「農業のより軽い部門 'the lighter branches of agriculture'」と表現している。具体的には、酪農、園芸、近郊農業、養鶏、養蜂、果樹栽培、市場調査など農業の分野を指す。

ウォリック伯爵夫人は 1898 年に英国西部の地方都市レディング Reading にて Lady Warwick Hostel を 1898 年 10 月 6 日に開学した。学校の場所は、レディングの Bath Road に位置する大きな邸宅 Coleyhurst を賃貸して学舎とした。カリキュラムはレディング大学 Reading College と共同で酪農、園芸、近郊農業、養鶏、養蜂、果樹栽培、市場調査などの理論を指導者から学び、敷地で実践を通して学んだ。すぐに、Coleyhurst だけでは狭くなり 1899 年には、2 つの学舎の建物を加えた。学舎の名称は、メイナード・ホステル Maynard Hostel とブルク・ハウス Brooke House とウォリック伯爵夫人の生家と婚家にちなんだ名前であった。

エディス・ブラッドリー Miss Edith Bradley が Lady Warwick Hostel の初代の学寮長 Warden として雇用された。エディス・ブラッドリーは、1905 年まで学寮長 Warden を務めた。Lady Warwick Hostel についての初期の多くの記録や記事はエディス・ブラッドリーによるところが大きい。

1902 年 7 月には、Lady Warwick Hostel はレディング大学 Reading College との連携を完全に断つことになって、独自にクラスと講義を提供することとなった。

それに先立って、1901 年 5 月 10 日にウォリック伯爵夫人は日刊新聞タイムズ紙にレディングから独

立した別の農業大学を女性のために設立することをアピールして3万ポンドから5万ポンドを目標に寄付金を募った。しかし寄付金はほとんど集まらなかった。そこで、彼女自身が主導権をとって当時売りに出ていた Studley Castle を2万5千ポンドの金額を私費で払って購入した。そして1903年にスタッフと学生をレディングから Studley Castle に移転させて Lady Warwick College, Studley と学校名称を変更した。

Studley Castle は、16世紀後半から17世紀初期に遡れる古城に隣接する形で1833年に建てられている。はじめの所有者は Sir Francis Lyttleton Holyoake Goodricke であるが、1863年に破産して手放した。そこで引き継いだ Walker 家も1890年に支払不能となり、Samuel Lamb が城を購入した。そして、また何人かの手を経て、ウォリック伯爵夫人が購入することとなった。

ウォリック伯爵夫人は、1908年まで創立者として学校経営に携わった。ウォリック伯爵夫人がパトロンとして運営に関わっている時期のレイディ・ウォリック・カレッジ Lady Warwick College, Studley についてみていこう。初代学寮長エディス・ブラッドリー Miss Edith Bradley が、1903年にスタッドリ一城 Studley Castle にキャンパス移転を経て1905年まで学寮長を務めた。2代目学寮長メイベル・フェイスフル Miss Mable Faithfull が1905年から1908年まで務めた。

カリキュラムとして、酪農、園芸、近郊農業、養鶏、養蜂、果樹栽培、市場調査などに、植民地での就職を目指した訓練 a colonial training scheme や主婦の家庭管理を主眼とした a housewife's course, ジャムや瓶詰めなどの加工品作りのマネージメントなども付け加わり、多彩となった。学校は2年の課程で、1年目は、午前中は座学、昼からは指導者について学内実習する。2年の課程が終わる時に王立園芸協会の認定試験を受けて認定資格を得る。

ウォリック伯爵夫人は先に紹介した回顧録の16章にて、女性が、田舎(the country)で土地に根ざして、土地に生きる利点と可能性について次のように述べている：「女性は十分な訓練を受けると土地(the land)においても、混雑する都市においてと同様に、よいコンピテンスを見せる。」、「田舎(the country)で働くことの計り知れない利点として、新鮮な空気の中で生活する、素朴な楽しみを享受する、健康と幸せになる」、過密な都市で就業する女性の健康と精神への悪影響について「たとえば都市のオフィスでタイピストとして1日8から10時間働く女性がいる。一方、土地で働き、土地から得た収入で暮らす女性がいる。この2人の女性における神経と精神の状態の違いは驚くべきものがある。」<sup>1)</sup>。

1905年から1908年まで勤務した2代目学寮長メイベル・フェイスフル Miss Mable Faithfull がインタビューによって、まとめた学校の初期の在學生と卒業生23名(學生AからJの10名と、卒業生1から13の13名の合計23名)のキャリアの事例を以下に紹介しよう：

【在學生のキャリア希望の事例】

- 學生A：ヴィオラ専門の園芸種苗業者に入社する。
- 學生B：農場に職を得て、酪農・乳業に関わる技術を実践する。
- 學生C：地主の娘として彼女の家族経営の地所の農場・庭園の管理業務：特に地所の地場産業(ルーラル・インダストリー rural industries)の開発。
- 學生D：役所(County Council)の園芸関係の指導者(公務員)。
- 學生E：近郊農業・市場向け野菜生産 a market gardener 関係の起業。
- 學生F：庭師として就職。
- 學生G：実家で自家の庭園の管理。



学生 H：養鶏関係の技術を身につけて実家で自身の養鶏農場の起業。

学生 I：養蜂と他分野の組み合わせの専門家（養蜂業の専門資格 the British bee-keepers' Exam を取得後）となり役所（County Council）で指導者となる。

学生 J：地主の娘であり、実家の地所に養鶏と酪農・乳業の部門を新たに家族経営。

【卒業生のキャリアの事例】

卒業生 1：カナダ（オンタリオ州）に 30 エーカーの土地を持ち酪農・乳業を営みチーズ生産販売、近郊農業生産物、養鶏業などで、大いに成功している。

卒業生 2：田舎の自らの地所を得て、養鶏と酪農・乳業を起業する。カレッジより農場経営の助言を受けて進める。カレッジの他の卒業生を主任庭師として雇用する。

卒業生 3：彼女自身の近郊農業・市場向け野菜生産業を起業して 5-6 年となる。彼女の姉妹と協力して運営し成功している。トマトを大量に生産している。

卒業生 4：ウェールズの国会議員の地所（大きな温室がある）の主任庭師を 6 ヶ月務めている。彼女は 3 人の男と 1 人の少年を部下に従えており、他に 1 人見習い学生も面倒を見ている。夏は 9 時間半の労働時間。冬は夜明けから日没までの労働時間。去年は数千個の球根を植えた。

卒業生 5：数エーカーある地所の主任庭師を 1 年半務めている。

卒業生 6：役所（County Council）での講師を務めた。

卒業生 7：他の園芸学校で教師をしている。

卒業生 8：酪農科の卒業生の中で最も成功したキャリアを築いたのちに結婚して引退。

卒業生 9：果物の瓶詰めの技術を学んだのちに植民地に移住して、この技術を実践した。

卒業生 10：レディングの英国酪農協会（the British Dairy Institute, Reading）で酪農マネージャーを務める。（これは、卒業生 8 が結婚する前についていた職である）。

卒業生 11：レディング大学（University College, Reading）で植物学講師のアシスタントを務める。

卒業生 12：スタッドリー・カレッジで養鶏についての指導者であるイエーツ Miss Yates 氏。

卒業生 13：スタッドリー・カレッジの園芸学部でのオーガナイザーの職を得ている<sup>2)</sup>

これらの 23 名のキャリアを概観すると、レイディ・ウォリック・カレッジで獲得した知識と技術を活かして女性の職業探求の視点から、農業の新分野（養鶏・酪農・乳業・養蜂など）やその組み合わせの多角経営など、農業起業についても、先駆的な挑戦をしていることがあげられる。それが可能になったのは、入学想定していた女子学生層「ジェントルウーマン‘gentlewomen’」あるいは「専門職家庭の娘たち」とされる上流・中産階級層の自活・自立が必要な女性がある程度、実際に入学したからであると考えられる。そのような学生たちは、もともと家族経営の農業起業のバックボーンを持っている有利な立場を享受しているような学生が多く、女性の力を家族の中で発揮しやすかったことが考えられるであろう。さらに、母校やその他の学校や役所などで教師を務めるといふ指導的な立場を目指し実現させた学生もいたし、庭師として地所や農場に就職した場合でも主任庭師として指導的な立場となっている卒業生も多い。一方、植民地へ移住して、カナダなどで農業経営を成功させている卒業生の事例もある。

米国の科学史学者の Donald Opitz は、19 世紀末以降ヨーロッパやアメリカで数多く開設されている女性のための農業・園芸の訓練学校の設立過程と教育内容を検討し、それが新しい女性のキャリア開拓の方向性となったことを指摘する。彼は、ウォリック伯爵夫人の運営するスタッドリーの女性のた

めの農業学校の理念は、「都市で無駄に過ごすのではなく『土地に帰れ』‘Back to the land’, instead of allowing them to run to waste in the town」という、ウォリック伯爵夫人の信じるイデオロギーの擁護であるが、科学という視点を教育にどのように導入しているのか検討している<sup>3)</sup>。

ウォリック伯爵夫人が携わっていた初期 1905 年から 1908 年までの大学内雑誌 *Studley College Agricultural Journal* の多岐にわたる内容を以下に 6 点紹介する：

- 1 「ケレースの娘たち‘the Daughters of Ceres’」としての使命：ケレースとはローマ神話に登場する豊穰を司る農業神である。学生はケレースの娘として農業に関わる働きを行い、世の中の全ての女性を幸せの方向に導くパイオニアであるべきという思想。
- 2 植民地経営を視野に入れたグローバルなつながり：南アフリカやカナダなどで卒業生や関係者が発信する現地の農業情報を共有する科学的記事が多い。
- 3 卒業後の出口の豊富さ：求人情報はイギリス国内、ヨーロッパ・植民地での庭園・農園管理など。
- 4 教育カリキュラムや最新事情：在学生の園芸ショーや農業ショーの受賞情報、新種の紹介、ネイチャー・ゲームやガーデン・シティなどの幅広い話題。
- 5 王立園芸協会との連携：2年修了時に王立園芸協会の認定試験を受ける。成績等の情報が掲載される。
- 6 きめの細かい人物・学生往来の記録。

私立女子農業・園芸学校レイディ・ウォリック・カレッジ *Lady Warwick College, Studley* が、ウォリック伯爵夫人の私費の財源に大部分を頼って運営するのには、財政的にも限界があった。1908 年にウォリック伯爵夫人が私的財産上の困難のため、経営から退いた時に学校の名称がレイディ・ウォリック・カレッジ *Lady Warwick College, Studley* からスタッドリー農業カレッジ *Studley Agricultural College* へと変更された。ウォリック伯爵夫人が経営から撤退したのち、しばらく学校運営は、経済的には困窮が続いたが、1912 年からは英国の農業省から公的補助金を受けながらスタッドリー農業カレッジ *Studley Agricultural College* として変遷を経ながら女子農業教育機関としての役割を果たし 1969 年に閉学した。

#### IV おわりに

最後に、ウォリック伯爵夫人の女子のための農業・園芸訓練学校に対する 2 つの視点を示してまとめとする。一つはレイディ・ウォリック・カレッジ *Lady Warwick College, Studley* に 1906 年から 1908 年まで留学した日本人留学生、半田たき(1871-1956) の視点である。もう一つは、農業・園芸訓練学校を修了した女子は、当時の社会でどのようにみられていたのかを示唆する小説からの事例である。

##### 1. 日本人女子留学生の半田たきの視点

半田たきは、1906 年から 1908 年までウォリック伯爵夫人の女子農業・園芸学校レイディ・ウォリック・カレッジに留学し、留学中スコットランドのコーデン城にて日本式庭園を依頼されデザインした。筆者は、半田たきの孫とともにたきの英国での足跡をたどるフィールドワークを行いバーミンガムの近郊スタッドリーにあるレイディ・ウォリック・カレッジ *Lady Warwick College, Studley* の跡地も訪れた<sup>注9)</sup>。

1907 年(明治 40 年)に半田たきたちレイディ・ウォリック・カレッジの学生が、ウォリック伯爵夫人の住む *Warwick Castle* に招かれたときの記述をみてみよう：

### ウォリック伯夫人

此年の秋校主ウォリック伯夫人より、職員、学生一同午餐に招かれ、汽車や自動車にて迎へられてウォリック城に着くと、燕尾服の正装をした紳士があちらこちらの窓より顔を出してのぞかるゝのは誰であろうか。内庭園即路地の囲ひの塀の上には七八羽の孔雀がとまつて、尾羽を扇の様に広げて歓迎するかの如く見ゆるものもある。一同玄関より室内に導かれ、夫人が出て来られた時一同起立して挨拶し、夫より夫人の室内にて室内を參觀した。各国の美術品が所狭きまで集められて並んでいる。日本美術の処では特に私に話しかけられて、日本品だと指摘せられた。一同ウォリック伯にもお目にかかった。六七〇名の多人数であつたから、食事は大広間にて立食式であつた。其時彼の燕尾服の男衆が給仕に出て来られて、二度びつくりした。食後暫時休憩の後、庭園内の散策に時を移す。庭園の広大なる、我国にて新宿御苑か赤坂離宮の御苑を思はしむるものであつた。

午後のお茶は此庭園内にて配せられた。十歳余の令息を伴はれて夫人が、私がお茶を頂いている処に来てお話をせられ、私が和服に袴を穿いたのを珍しがられた。四時過の汽車に送られて一同、夕刻学校に帰つた。

貴族の生活は実に豪華なものであるが、親しき接待振りには感じ入つた。伯夫人は元貴族ではないが、ロンドンにて有名な社交界の婦人で、社会主義者の評判ありて美人であり才媛であり、伯に見出されて夫人となられたと云ふ。私共の農大スタツドレーカレッジを設立されたのは此夫人である<sup>4)</sup>。

日本人留学生半田たきも、創立者ウォリック伯爵夫人の思想と彼女の風貌について「社会主義者の評判ありて美人であり才媛」と捉えていた。半田たきの経験したレイディ・ウォリック・カレッジでの学生の学びの実際について、農業・園芸に関する実習を中心に以下のように記録される：

### 作業

学生の定員数は全部で五十名と云ふ。園芸科二年を主として、付属加工法（一年？）養鶏科一年制、随意科として養蜂科一年、デーリー（パタ、チーズ製法）等である。

園芸科の生徒は二年の後、英国園芸学会(Royal Horticulture Society)の試験を受けて資格を得ると、望むものが大多数にして、学校の卒業を目的とするものは、殆どない位である。毎年六月に施行され、ロンドンより学会の試験委員出張の許に行はるゝ。

一年級の時は上級生と組んで、実地を見習ひながら作業を始め、花卉栽培の温室より始め次第に暖室の扱ひ方に移る。花のみならず「トマト」苺、葡萄、桃等、温帯植物の温室栽培に移って行く。

春の暖かき季節になれば、戸外栽培法や土の掘り方を教へらる。二月頃より温室内にて菊の挿芽を始む。當時英国にては、小菊のしほらしいものは栽培せられず、専ら大輪のみであつた。一株に三輪をつくる鉢栽培法であつた。見事なものがあつた。菊は我国特有のものであると思ふてみた私は驚かざるを得なかつた。果菜類の胡瓜、マスクメロン等は、暖室にて栽培せられ、日中になれば各受持の温室に入りて、人工授粉を施す。トマトの如きは、一本一本莖を軽く叩きて花粉を散らし、桃や葡萄の如く高く昇つたルものは、竹の先に兔の尾を結びつけたもので軽く花を拭き、昆虫の代理を為すのである。マスクメロン、西瓜の如きは雄花の雄めしを、雌花の雌めし頭

に塗りつけるのである。胡瓜は新る面倒をせずとも、授粉なしに結果する。種なしにて却って優品が得られるといふ。二年生になれば温室当番の外は、一室を責任を以て受持され、深夜ストーブの石炭つぎから朝夕の空気入換へなどまでさせられるのである。常に寒暖計を見て温度の調節はもっとも大切なこととなっている<sup>5)</sup>。

さらに半田たきは、レイディ・ウォリック・カレッジでの農業・園芸に関する実習と講義による学生生活を次のように語る：

講師

半日作業をすれば半日講義を聴く、園芸の講義の外に肥料、害虫學、植物學、地質學、簿記法、其他養鶏科等各々専門の講義が夜七時迄も続くことがある。終りて大急ぎにて身支度して、七時半の食事に漸く間に合ふこともある。食後は筆記の整理や臨時試験の答案書き等に一杯である。講師の中でも最も責任の重大なのは、園芸科のイーグルトン講師の様に思われた。時間数も一番多かった。

而して只講義のみでなく実地の指導であった。1週に三日間は必ず学校に泊まれた。土曜日は半休、日曜日には温室当番の外の人、附近の教会礼拝に出席する。(学校にてもマイ朝食前に公堂に於て、校長司会の許に必ず祈祷、聖書朗読の礼拝が行はる) <sup>6)</sup>

## 2. 1920年に発表されたアガサ・クリスティの推理小説に登場する「いまどきの女庭師」

ウォリック伯爵夫人が創立した女子のための農業・園芸訓練学校の修了生はどのような場所で働いて、社会でどのように受け止められてきたのであろうか。参考になるのは、1920年に発表されたアガサ・クリスティ(山田蘭訳)『スタイルズ荘の怪事件』に出てくる「いまどきの女庭師 a new-fashioned woman gardener」という言葉である。ちなみに、この作品は、1920年に発表されたアガサ・クリスティの最初期の作品で、初めて、エルキュール・ポワロ探偵が登場する。

ポワロは立ちあがり、窓に歩みよった。「あの花壇は本当にすばらしい。こちらのお屋敷では、庭師を何人雇っているのかね?」「いまはたった三人なんです。開戦前は五人いて、紳士のお屋敷らしくお世話もゆきとどいていたんですが。あそこのお庭を見ていただけたらと思いますよ。本当にすばらしい眺めでした。それが、いまはマニングのじいさんと息子のウィリアム、あとはズボンなんかをはいた、いまどきの女庭師がいるだけですからね。ああ、嫌な時代になってしまったものだわ!」<sup>7)</sup>

ウォリック伯爵夫人の回顧録の第16章「レディングとスタッドリーにおける先駆 Pioneering at Reading and Studley」に紹介しているレイディ・ウォリック・カレッジの卒業生のキャリアを見ると、地主の地所に雇われて女性主任庭師となつて、部下に男性庭師を数人従えている1908年頃の卒業生の事例がある。その後、1914年から1918年までの大戦をはさんで、彼女たちは、アガサ・クリスティ『スタイルズ荘の怪事件』が刊行された1920年には、先駆 Pioneering よりも、もう少し進んだ「いまどきの女庭師 a new-fashioned woman gardener」となっていた。当時は奇異に見られた「ズボンなんかをはいた、

いまどきの女庭師」の服装と身体も新しい女性の表象として社会の中で受け入れられつつあった。

【注】

注1 英国貴族の名前の呼称の形態は複雑であり、結婚や夫の爵位の継承などのライフコースの段階によって変化する。本稿での主人公ウォリック伯爵夫人フランセーズ・イヴリン・グレヴィル Countess of Warwick, Frances Evelyn Greville は、生まれた時の名前は、生家の苗字でフランセーズ・イヴリン・メイナード Frances Evelyn Maynard である。彼女が、フランシス・グレヴィル Francis Greville と結婚してからは、彼女は、夫の苗字フランセーズ・イヴリン・グレヴィル Frances Evelyn Greville という名前になる。さらに夫のフランシス・グレヴィルは、父親であるウォリック伯爵の爵位相続人 Earl of Warwick's heir でもあったため、その敬称 courtesy title として、社交の場ではロード・ブルク Lord Brooke と呼ばれた。この段階では彼女は、社交の場では、レイディ・ブルク Lady Brooke との呼称を得る。その後、夫が爵位を継承したのちウォリック伯爵 the Earl of Warwick となると、彼女もウォリック伯爵夫人 the Countess of Warwick となる。同時に、社交の場での彼女の呼び方は、レイディ・ウォリック Lady Warwick となる。このレイディ Lady というのは、公爵(Duke)以外の爵位の夫人に使われる社交の場での呼び方である。一方、彼女は幼少時から人生を通じてニックネームとして、デージー'Daisy'とも呼ばれた。このデージーというニックネームは、フルネームの一部として使用されることは通常はない。本稿において、彼女のことを、一貫してどのような呼称を使用するのかが、問題であったが、最もふさわしいと考えられるのは、レイディ・ウォリックである。彼女は、彼女が設立した女子農業・園芸訓練学校を、レイディ・ウォリック・ホステル Lady Warwick Hostel と命名している。ただし、本稿では、彼女の他の呼称の形態も、文脈に応じて、使用する。ウォリック伯爵夫人の複雑な呼称の形態についてご教示いただきました Dr Ben Cowell (Director General, Historic House Association, UK)に感謝申し上げます。英国貴族の爵位と場面による複雑な呼称のルールについては新井潤美『ノブリス・オブリージュ：イギリスの上流階級』白水社, 2022 に詳しい。

注2 S. Daniels and C. Nash, 'Lifepaths: geography and biography', *Journal of historical geography* 30, pp. 449-58, 2004 参照。筆者はダニエルズとナッシュが提唱するライフヒストリー/ライフジオグラフィヤーの視点から園芸・庭園をテーマに一連の研究を続けている：橋セツ「庭園をめぐるライフヒストリー/ライフジオグラフィヤー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」『神戸山手大学紀要』第8号, 89-106頁, 2006; 橋セツ「世界漫遊旅行者と庭園：エラ・クリスティーの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園」『神戸山手大学紀要』第10号, 31-49頁, 2008; 橋セツ「近代英国のガーデニングとモラル：ジョン・クローディアス・ラウドンとジェーン・ラウドン夫妻の思想と実践からの考察」『神戸山手大学紀要』第14号, 151-166頁, 2012; 橋セツ「1950年代に活躍した英国人著述家マージェリー・フィッシュによる庭園の語りから試みるホームとジェンダーをめぐる庭園の文化地理学」『神戸山手大学紀要』第18号 43-57頁, 2016; 橋セツ「英国人女性画家エブリン・ダンバーの描いた戦時のガーデニングとジェンダーをめぐる文化地理学」『神戸山手大学紀要』第19号, 49-68頁, 2017; 星珠枝・橋セツ「園芸家半田たきの明治後期の英国留学：家族史とライフヒストリー/ライフジオグラフィヤーの視点から」『神戸山手大学紀要』第13号, 79-111頁, 2011などを参照。

注3 ウォリック伯爵夫人デージー・グレヴィルの著作は以下の12冊である。庭園やウォリック伯爵家の居城の歴史、失業などの社会情勢について論じた政治的パンフレット、女性と戦争、ウィリアム・モリスの伝記、自然科学に関わる青少年向け読み物まで彼女の著作のテーマは幅広い。彼女は多くの同時代の思想家・作家とも交流していて H.G Wells との共著も含まれる：

Frances Evelyn Maynard Greville Warwick (1898) *An Old English Garden*. [→garden at the Stone Hall of



Easton Lodge, Shakespeare Border and Roserie]

Frances Evelyn Maynard Greville Warwick (1898) *Joseph Arch, the story of his life*.

Frances Evelyn Maynard Greville Warwick (1903) *Warwick Castle and its Earls, from Saxon times to the present day*

Frances Evelyn Greville Warwick (1906) *Unemployment: its causes and consequences*. The Twentieth Century Press.

The Countess of Warwick, with an introduction by Sir John E. Gorst (1906) *A Nation's Youth: physical deterioration: its causes and some remedies*.

Frances Evelyn Greville Warwick (1912) *William Morris: his homes and haunts*.

H.G Wells and Frances Evelyn Greville Warwick (1912) *The Great State: essays in construction 1912*.

Frances Evelyn Greville Warwick (1916) *A Woman and the War*

Frances Evelyn Greville Warwick (1917) *Memories of Sixty Years*. Cassell & Co.

Frances Evelyn Greville Warwick (Countess of) (1929) *Life's Ebb and Flow*. W. Morrow & Company

Frances Evelyn Greville Warwick (1931) *Discretions*. C. Scribner's sons

Frances Evelyn Greville Warwick (1934) *Nature's Quest*. John Murray.

注 4 この庭園を記念して、イーストン・ロッジでは、Millennium Sundial を復元設置している。Catherine French (N.D) *The Millennium Sundial and Shakespeare Border at Easton Lodge*. The Gardens of Easton Lodge.

(2018 年 Easton Lodge の公開日に売店にて購入) に詳述されている。イーストン・ロッジの地所は、デイジーの死後、子 Maynard Greville (1898-1960) が継承したのち、その娘が 1960 年に継承したが、2004 年にメイナード家が 400 年にわたって私有した地所を手放した。現在、イーストン・ロッジの庭園は、Warwick House の所有者と Land Securities PLC の 2 者によって分割所有されている。現在は、「イーストン・ロッジの忘れられた庭園 The forgotten gardens of Easton Lodge」プロジェクト (荒廃した庭園の再発見と復原展示) が実施されており、イーストン・ロッジの庭園の修復、公開などの管理は The Gardens of Easton Lodge Preservation Trust (registered charity no 1101442) のボランティアが行っている。イーストン・ロッジの庭園は、現在、年に 9 回程度公開しており、筆者は、2018 年 7 月、2019 年 8 月の公開日に、歴史資料を収集して展示する文書館 Archive Building (2013 年に設置) と庭園を訪問した。庭園には、かつてハロルド・ペト Harold Peto がデザインした日本風庭園の跡地も含まれている。ハロルド・ペトの庭園デザインの全貌については、Whalley, Robin, *The Great Edwardian Gardens of Harold Peto: from the archives of Country Life*. Aurum Press, 2007 に詳しい。イーストン・ロッジ庭園は、イングリッシュ・ヘリテージのグレード II English Heritage, Grade II に登録されている。<https://www.eastonlodge.co.uk> (2022 年 8 月 22 日閲覧)

注 5 ウォリック城 Warwick Castle は、デイジーの夫第 5 代ウォリック伯爵 5th Earl of Warwick が継承し、第 6・7 代ウォリック伯爵に受け継がれたのち、第 8 代ウォリック伯爵が、ウォリック城を所有することが財政的に困難となり 1978 年にタッソー・グループに売却した。2007 年から、マリーン・エンターテイメント社がテーマパーク事業として商業的にウォリック城の地所を管理・運営・公開している。<https://www.warwick-castle.com> (2022 年 8 月 21 日閲覧)

注 6 皇太子アルバート (後のエドワード 7 世在位 1901-1910) は、アレクサンドラ王妃と結婚した。彼は、関係した女性は何百人といたと言われるが、王妃も認めた愛人 (ロイヤルミストレス) が、デイジーを含めて 3 名いた。はじめは、リリー・ラングトリー (Lily Langtry 1853-1929) の 3 年間 (おそらく 1878 年から 1880 年)、次が本稿の主人公デイジーの約 8 年間 (1889 年から 1897 年まで)、3 人目

はアリス・ケッペル (Alice Keppel 1869-1947) のエドワード7世の死までの12年間である。エドワード7世については、森護『英国王と愛人たち』河出書房新社、275-309頁、1991が詳しい。

注7 イーストン・ロッジ地所の庭園内に掲示される、ガイドマップ The Forgotten Gardens of Easton Lodgeによると、庭園の敷地には以下のように18の庭園や建物があり、ハロルド・ペトが改善したデザインに復元するプロジェクトが進んでいる：1 Archive Building; 2 'Daisy's' Refreshments Area; 3 Italian Gardens; 4 Treehouse; 5 Lime Wood; 6 Glade; 7 Tenboudai (viewing platform); 8 RAF Stirling Walk; 9 Shelley Pavilion; 10 Walled Garden; 11 Croquet Lawn; 12 Yew Walk; 13 Formal Lawns; 14 Peto Pavilion; 15 Millennium Sundial; 16 Warwick House (Private); 17 Peto Courtyard; 18 Dovecote (Private) 注3で前掲したウェブサイトも参照。(筆者は、2018年7月、2019年の8月の庭園公開日に訪問)

注8 ウォリック伯爵夫人が1898年創立した私立女子農業・園芸訓練学校 Lady Warwick Hostel とその後継の女子農業・園芸スタッドリー・カレッジ Studley Women's Agricultural and Horticultural College についての一次資料が University of Reading, Museum of English Rural Life の Studley College Archive に所蔵されている。オンラインカタログの冒頭に Studley College についての沿革が詳述され、本稿でも依拠している。<https://merl.reading.ac.uk/collections/studley-college-archive/> (2022年8月25日閲覧)

注9 半田たきが Lady Warwick College, Studley に留学した時の学生生活については、筆者は以下の論文にも詳述した。半田たきの孫との共著論文である：星珠枝・橘セツ「園芸家半田たきの明治後期の英国留学：家族史とライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点から」『神戸山手大学紀要』第13号、79-111頁、2011。さらに Tachibana, Setsu 'The "Capture" of Exotic Natures: Cross-cultural Knowledge and Japanese Gardening in Early 20<sup>th</sup> Century Britain' 『人文地理』66-6、4-18頁、2014 参照。

### 【引用文献】

- 1) Frances Evelyn Greville, Warwick (Countess of) *Life's Ebb and Flow*. W. Morrow & Company, 249-250頁, 1929 (引用部分の日本語訳は筆者による)
- 2) 前掲書, 248-251頁
- 3) Opitz, Donald L. 'Back to the land': Lady Warwick and the movement for women's collegiate agricultural education. *Agricultural History Review*. 62-1, 119-145頁, 2014 (引用部分の日本語訳は筆者による)
- 4) 中目たき『思ひ出の記』協栄新聞社出版局, 83-89頁, 1954
- 5) 前掲書, 77-78頁
- 6) 前掲書, 78-79頁
- 7) アガサ・クリスティ (山田蘭訳)『スタイルズ荘の怪事件』創元推理文庫, 89頁, 2021

### 【参考文献】

- Anand, Sushila, *Daisy: the life and loves of the Countess of Warwick*. Piatkus, 2008
- Blunden, Margret, *The Countess of Warwick*. Cassell & Co, 1976
- Buttery, David, *Portraits of a Lady: an illustrated life of Frances, Countess of Warwick*. Brewin Books, 1988
- Daniels, Stephen and Nash, Catherine, 'Lifepaths: geography and biography' *Journal of Historical Geography* 30-3, 449-458, Elsevier Ltd, 2004
- French, Catherine, *The Millennium Sundial and Shakespeare Border at Easton Lodge*. The Gardens of Easton Lodge, (N.D)

- ・ Lang, Theo, *My Darling Daisy*. Michael Joseph, 1965
- ・ Magnus, Imogen and Spencer-Jones, Rae, *The History of Easton Lodge*. The Trustees of the Gardens of Easton Lodge, 2014
- ・ Opitz, Donald L. 'Back to the land': Lady Warwick and the movement for women's collegiate agricultural education. *Agricultural History Review*. 62-1, 119-145, 2014.
- ・ Tachibana, Setsu 'The "Capture" of Exotic Natures: Cross-cultural Knowledge and Japanese Gardening in Early 20<sup>th</sup> Century Britain' 『人文地理』 66-6, 4-18, 2014.
- ・ Tachibana, Setsu; Stephen Daniels and Charles Watkins, 'Japanese gardens in Edwardian Britain' in Nuala C. Johnson eds. *Culture and Society: Critical Essays in Human Geography*. Routledge, 109-139, (paperback edition), 2018
- ・ *Studley College Agricultural Journal, 1905-1908*
- ・ Warwick (Countess of), Frances Evelyn Maynard Greville, *Life's Ebb and Flow*. W. Morrow & Company, 1929
- ・ Whalley, Robin, *The Great Edwardian Gardens of Harold Peto: from the archives of Country Life*. Aurum Press, 2007
- ・ 新井潤美『ノブリス・オブリージュ：イギリスの上流階級』白水社, 2022
- ・ アガサ・クリスティ（山田蘭訳）『スタイルズ荘の怪事件』創元推理文庫, 2021
- ・ 橘セツ「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」『神戸山手大学紀要』第 8 号, 89-106 頁, 2006
- ・ 橘セツ「世界漫遊旅行者と庭園：エラ・クリスティの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園」『神戸山手大学紀要』第 10 号, 31-49 頁, 2008
- ・ 橘セツ「英国のカントリーハウス庭園とポライト・ツーリスト：19 世紀後半から 20 世紀のニューステッド・アビーを中心に」『神戸山手大学紀要』第 12 号, 71-89 頁, 2010
- ・ 橘セツ「近代英国のガーデニングとモラル：ジョン・クロード・ラス・ラウドンとジェーン・ラウドン夫妻の思想と実践からの考察」『神戸山手大学紀要』第 14 号, 151-166 頁, 2012
- ・ 橘セツ「都市の観賞植物と庭園の変容：近代英国における園芸とモラルの実践」日本地理学会ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ監修, 池谷和信編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第 2 巻生き物文化の地理学』海青社, 301-323 頁, 2013
- ・ 橘セツ「1950 年代に活躍した英国人著述家マージェリー・フィッシュによる庭園の語りから試みるホームとジェンダーをめぐる庭園の文化地理学」『神戸山手大学紀要』第 18 号, 43-57 頁, 2016
- ・ 橘セツ「英国人女性画家エブリン・ダンバーの描いた戦時のガーデニングとジェンダーをめぐる文化地理学」『神戸山手大学紀要』第 19 号, 49-68 頁, 2017
- ・ 中目たき『思ひ出の記』協栄新聞社出版局, 1954
- ・ 星珠枝・橘セツ「園芸家半田たきの明治後期の英国留学：家族史とライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点から」『神戸山手大学紀要』第 13 号, 79-111 頁, 2011
- ・ 森護『英国王と愛人たち』河出書房新社, 1991